

# 有機農業 点を面にする

『季刊地域』2025年夏号(62号)特集より

地球温暖化対策と並んで持続可能な食料システムの構築は世界的な課題です。日本では、農林水産省が2021年に「みどりの食料システム戦略」を策定し、2050年までに有機農業を全耕地の25%（約100万ha）に拡大する目標を掲げています。

有機農業に地域ぐるみで取り組む「オーガニックビレッジ宣言」をした市町村は131（24年度末）まで増えました。

（一社）農山漁村文化協会（農文協）が発行する『季刊地域』2025年夏号（62号）では、このオーガニックビレッジの取り組みを中心に「有機農業 点を面にする」という特集を掲載しています。



『季刊地域』2025年夏号(62号)表紙  
7月7日発売、B5判、本文144p  
(うちカラー96p)

## 富山県南砺市の先駆者たち

富山県南砺市は、市内で先駆的に有機農業に取り組んできた方々と連携しながら、耕作放棄地の発生防止や若い新規就農者の受け入れによる地域活性化を推進する、という目標を掲げています。先駆者の一人は、JAを定年退職したのを機にイネの自然栽培を続けてきた農家。近所に仲間を増やしながらか「2回代かき」という抑草技術を身につけて単収を倍増させました。消費者向けに米づくり教室も開いています。「卒業生」のなかからは移住就農する人も出てきました。

また、野菜を有機栽培しながら共同で販路を開拓するグループを運営する若い農家は、身近な有機物を原料に堆肥を生産し、販売もすることで、地域に有機農業を広めています。彼はまた、堆肥の原料の麦芽粕を引き取る

市内のクラフトビール工房と近所の集落営農組織を引き合わせ、地元産麦のビールづくりを働きかけたりもしています。



イネの自然栽培を地域で広げる「なべちゃん農場」（富山県南砺市）の皆さん  
移住就農者2人を含む4人で米づくりの法人を今年立ち上げた

## 有機農業と学校給食の連携

長野県松川町は有機学校給食の先進地のひとつ。地域に有機農業を広げるうえで学校給食との連携が鍵になるといわれます。それはなぜなのか？有機野菜の栽培を始めた農家を起点に、学校給食の栄養士や調理員、地元企業などを巻き込んで、有機農業が町ぐるみの動きに広がる様子取材しています。

また、オーガニックビレッジではありませんが、JAとして有機農業研究会を立ち上げた茨城県のJA水戸組合長のインタビュー記事もあります。いずれは部会組織に発展させたいと言いつつも、農家以外でも入れる研究会をJAが運営することの意義と、すべての農家が経営の一部に有機農業を取り入れるのが理想、と話すのが印象的でした。

有機農業は化学肥料や化学農薬を使わない農業とされていますが、それは一面的な捉え方に過ぎません。そ



有機給食を推進する長野県松川町の学校給食の様子

れを各地の事例が浮き彫りにしています。それぞれの始まりの点は、消費者・市民も巻き込んで面として広がっています。

【（一社）農山漁村文化協会 編集部】

栽培基礎講座／ほうれんそう栽培の基礎と高温対策	2
栽培技術セミナー／「グリーンな栽培体系による水稲栽培マニュアル」	4
栽培技術セミナー／厳寒期でも安定した温室暖房が可能な 地下水熱源ヒートポンプ	6
施肥技術セミナー／茶園における温室効果ガスの発生を抑制する肥培管理	8
防除技術セミナー／土寄せ時期を早期化し ネギ葉枯病の黄色斑紋病斑の発生を抑制する	10
新技術セミナー／水稲有機栽培の雑草防除に 縦横2方向の機械除草を可能とする両正条移植と直交除草	12
JAと連携した農業普及活動 都市農業における抵抗性ハダニ類防除 なし圏での天敵利用を核としたIPMの取り組み	14
届け！全農の取り組み／緩効性肥料の被覆剤の流出防止に向けた取り組み	16
太鼓判 おすすめ品種紹介 第49回／ほうれんそう	18

商品ガイド／水溶化腐植入り土壌改良資材「ネバリン」	20
商品ガイド／省エネでエコな 施設園芸用ヒートポンプ「グリーンパッケージNGP109TQ」	21
営農アシスト／環境調和型農業の実践ツール 「グリーンメニュー」の普及に向けて	22
インフォメーション／有機農業 点を面にする	24

9月号読者アンケートのお願い  
よりよい誌面づくりのために、皆さまの声をお寄せください。  
回答締切：令和7年9月30日(火)  
回答方法：二次元コードもしくはURLから  
URL：https://forms.office.com/r/vgsWWQHbK9

